

地域で孤立しない関係づくり

～来住者が楽しく暮らせる地域を目指して～

岡山県真庭市 難波 吉伸



はじめに

私は昨年入籍し、現在妻と 2 人で賃貸アパートに住んでいる。結婚を機に自分や妻が地域に対してどのように関わっていくか、自分の知り合いがいない地域に入っていく時に、孤立せず楽しく暮らしていくためには、何が大切なのかを考えるようになった。

そして、県外から結婚を機に当市にやってきた友人の奥さんと話をした時、当市にきてからの苦労した話を聞いた。それは、当市に転入してから知り合いがおらず職場と自宅との行き来のみで孤独感を感じていたということだった。

当市に転入する人もさまざまで、何かを求めて移住する人ばかりではなく、結婚や転勤など期せずして住むことになった人もいる。そのような人は事前に地域とのつながりを持つことができず、引っ越してから孤立してしまう場合がある。

また、私自身もそうだが、結婚を機に一旦家を出る場合や市外から引っ越してくる場合に賃貸アパートに住むことが多く、地域や近所との関わりがほとんどないということが多い。賃貸アパートでの生活は、地域とのつながりが希薄になり、地域に愛着を持つことが難しい環境だといえる。

せっかく縁あって当市に住むことになった人が地域から孤立してしまい、辛い思いをしてしまつては、本人にとっても地域にとってもマイナスである。地縁のない転入者が、孤独感を感じることなく地域での暮らしを楽しむことが、地域に愛着を持つきっかけになるのではないかと。

農村部である当市も人の移動性が高まり、もともと地域で生まれ育った人ばかりではなく、結婚や就職を機に移り住んできた層の割合が大きくなってきている。本レポートでは、結婚や就職を機に当市に転入してきた女性を「来住者」と定義し、この来住者が新たな出会いを通じて地域に溶け込み、孤独感を感じずに楽しく暮らすために何ができるのかを考察していきたい。

1. 真庭市の概要

岡山県真庭市は、平成 17 年 3 月 31 日に 9 町村（真庭郡勝山町、落合町、湯原町、久世町、美甘村、川上村、八束村、中和村及び上房郡北房町）が合併して誕生した市である。岡山県北部の中国山地中央部に位置し、東西に約 30 km、南北に約 50 kmあり、面積は約 828 km²と岡山県の 11%を占め、県下最大となっている。市全域が中山間地域に位置付けられており人口は 46,124 人（平成 27 年国勢調査より）。市中部に位置する勝山、久世、落合地域の人口が多く、スーパーなどの商業施設もこれらの地域に多くある。

結婚や仕事を機会に転入する人は、買い物や通勤の便利な勝山、久世、落合地域に住むことが多く、必然的にこれらのエリアに賃貸アパートも多く建設されている。

国勢調査による人口統計では、平成 17 年の 20～24 歳女性は 885 人だが、10 年後の平成 27 年の 30～34 歳は 1,021 人になり、136 人増加している。U ターン就職で地元に戻ってきた人や結婚を機に真庭市に転入した人がいると考えられる。

また、20～40 代女性の人数は、平成 17 年の 7,305 人から平成 27 年の 5,876 人、と 1,429 人減少し、女性全体に占める割合も 30.4%から 27.3%に減少している。

婚姻状況についてみると、同年代に占める配偶者の割合は、平成 17 年では 20～24 歳は 20%、25～29 歳が 51%、30～34 歳は 72%、35～64 歳までは 80%台を推移しており、20 歳代から 30 歳代までに多くの人が結婚していることがわかる。それに対し平成 27 年は、20 歳～24 歳が 13%で、そこから婚姻割合が徐々に増え 45 歳～49 歳で 81%となり、それ以降は 80%台で推移している。平成 17 年と比べると、まず全体的に婚姻の割合が下がっていること、そして 20～24 歳の婚姻割合が下がり、逆に 45～49 歳まで婚姻の割合が増えて晩婚化が進んでいることがわかる。

2. 農村部に嫁ぐ女性の環境の変化

時代とともに当市の来住者を取り巻く環境も変化している。以前は、地域に入ると婦人会へも自動的に入会することになり、同じような境遇の人と自然とつながる機会があった。

しかし今日では、賃貸アパートに住む来住者の多くは、そもそも婦人会に入るという考えもなければ、勧誘されることもほとんどない。そして既存の婦人会の会員であっても、共働き世帯が増えたことから、平日は自宅におらず、土日は家庭の用事があり、婦人会の活動が負担になり積極的に活動しにくい環境にある。

市内のある婦人会では、草刈りや井手さらい（用水路・溝掃除）の後の慰労会の段取りやお年寄りへの弁当配布など活動しているが、参加者の年齢も 60 代を超え、新たに加わる人もいない状況である。私の実家の地域にあった婦人会も、新たな参加者がおらず既存会員の負担が大きくなっていくことから解散することになった。これまでの地域コミュニティの仕組みが機能しなくなっている現状がある。



図 1 岡山県真庭市図

また、以前は結婚すると、2世帯、3世帯で同居していた。同居によって家事や子育てを夫婦だけでなく親と分担して行うことができ、嫁の立場でも時間的・精神的な負担の軽減につながり心の余裕を持つことができた。しかし、今は核家族世帯が多くなり、家事や子育てによる体力的な負担や精神的な負担が大きく、地域の活動に積極的に参加しにくい状況にある。

そして、以前は親が地域との橋渡しの役割を果たしていたともいえる。地域にどんな人がいて、どんなつながりがあるのかといった話も自然と知ることができた。しかし今では、賃貸アパートに住むようになり、地域の情報が入りにくく、地域とつながることに抵抗感が強くなってしまっている。

3. 来住者の声を聞いてみる―転入者及び出身地区外からの転居者への聞き取り調査

このような状況の中、結婚を機に市外から転入、もしくは出身地域外に住んでいる来住者に対して、転入した時に感じたことや何を必要としているかヒアリングを試みた。

(1) Aさん：20代女性・既婚、県外出身、結婚を機に転入

大学卒業後は地元で就職し数年間を過ごし、学生時代に知り合った夫との結婚を機に仕事を辞めて当市へ転入した。転入するまでは当市に知り合いはほとんどいない状態で、転入してすぐは賃貸アパートに住み始めた。転入してしばらくして学童保育に勤務するようになったが、同僚は50歳代くらいで年齢が離れプライベートでの付き合いはなかった。アパート入居者同士での関わりはなく、職場と自宅との行き来のみで孤独感を感じていた。

ある日、他の入居者が深夜酔っぱらって間違えて部屋に来たことがあり、恐怖を感じたが、その際夫は夜勤で不在にしており、近くに知り合いはいなかった。実家の両親や友人に電話して、最終的には夫の両親にアパートに来てもらったが、相談することもたびたびになると遠慮してしまい難しいと感じていた。

現在は真庭市北房地域に家を建て1歳の子どもがいる。子育てサロンに参加し、親同士や真庭市外出身者といった同じ境遇の人と出会い、知り合いが増えた。

子育てサロンの保健師が市外出身者同士を意識的につなげてくれ、新たなつながりもできた。1回だけでなく2回、3回と同じメンバーで会うようにセッティングしてくれ、よいきっかけになった。ある程度強引に誘われても、結果的につながることができてよかった。

また、現在住んでいる地域も新興の分譲エリアで、自分自身や子どもの世代とも近い人が多く近所付き合いもあり、日中に自宅を行き来するような良好な関係が築けている。

お母さん同士で話をしていると、お母さんたちはみんな特技やパワーがあるのに、それを発揮する場がないと感じている。

(2) Bさん：30代女性・既婚、県外出身、夫の転職を機に転入

大学卒業後、民間企業に就職し、夫とは前職で知り合う。夫の地元である当市への転職が決まり、真庭市へ転入した。転入当初は、市が指定管理を委託している体育施設で企画されたヨガ教室などに通ってみたが、参加者の年齢層が自分とは大きく異なったため、数

回で行かなくなってしまった。

その後、市内で臨時職員として勤務。勤務する中で知り合いが増えていった。

転入前に夫の親戚が所有する戸建てへの入居も候補に挙がったが、まったく知らない地域での近所付き合いに抵抗があり、アパートに住むことにした。夫婦二人だけで生活していて、自分たちの時間を大切にしたいと考えている時期には、濃い近所付き合いには及び腰になってしまうが、子育てがはじまる、家を建てる、もしくは夫の実家での同居など、状況が変わってから近所付き合いはしていくことになると考えている。

(3) C さん：30 代女性・既婚、市外出身、夫の転職を機に転入

賃貸アパートで子どもと 3 人暮らし。夫の実家に住むことも考えたが、すぐに同居するよりもまずは二人での生活を、と考え、現在の住まいに決めた。

夫が真庭市出身であるが、そのつながりでの知り合いはおらず、出産を機に育児相談などで出会った人と知り合いになった。

知り合いができるきっかけは、どのような形でも構わず、いなくてもよいが、知り合うのであれば同世代の子育て世帯がいい。

情報収集は、インターネットで市のサイトを確認したり、インスタグラムの写真を見たりしている。ハンドメイドマルシェ、もみじ祭り、育児相談、図書館の読み聞かせなどのイベントに参加しており、おいしい食べ物が買える、食べられるイベントに関心があり参加してみたいと感じている。外出しやすい曜日の指定はないが、9時から17時までの時間帯がいい。

(4) D さん：30 代女性・既婚、県外出身、夫の転職を機に転入

夫の転職で地元真庭市に U ターン就職することを機に転入し、転入当初はアパートで生活していた。現在は夫の実家で同居している。

転入前は孤独にならないか不安を感じ、転入直後は子どももおらず、仕事もしていなかったため、夫以外と話をする機会がなく、知り合いが欲しいと思った。

今も自分の世界が狭くなっていると感じ、新たな知り合いは欲しい。社会に出て自分の知らない世界で生活している人の話を聞きたい。子どもつながり以外の知り合いが欲しい。

その後は勤務先で友人ができ、子どもができて産院や子育てサロンでも知り合いができた。子育てサロンは自由でありあまり干渉されないのが楽に感じる。ただし、自分から話しかけないとなかなか仲良くはなれず、グループができていると後から入りにくい。

夫の職場の人と知り合いになったが、子どもができて疎遠になってしまった。夫の顔をつぶさないように気を遣うのが疲れてしまう。知り合うきっかけは夫つながりでないほうがいい。

妊娠前まではジムに行っており、子どもが 2 歳を過ぎてからはマルシェによく行くようになった。いろいろな食べ物や雑貨屋が集まったりするイベントには関心があり、土曜日、日曜日の午前中から昼過ぎの時間帯がいい。またイベントには、食べ物の種類が豊富で、子連れで行くのでイスを多く配置して欲しい。

転入前は特に転入先の地域（イベント）の情報収集はしておらず、転入後にインターネット、フェイスブック、インスタグラムで情報収集したり、義理の祖父母に聞いたりした。

（５）E さん：30 代既婚、近隣市出身、結婚を機に転入

近隣市町村出身で真庭市内の友人も複数いるため、新たな出会いをそれほど求めていない。ただ、賃貸アパートには真庭ケーブルテレビ（MIT）は導入されておらず、告知放送端末も設置されていないため、地域の情報や火事情報が即座に入っていない。ちょっとしたことではあるが、地域との関わりが乏しくなってしまうと感じている。

（６）F さん：40 代女性・既婚、真庭市内出身、結婚を機に市内別地域へ転居

強いつながりを求めているわけではなく、友人ができて常につながることには抵抗はあるが、地域との関わりについて必要性は感じている。

お店、市役所窓口、図書館など、普段の生活の中で接する人との世間話や何気ない挨拶だけでも、自分が地域と関わりをもっているように感じる。

マルシェや食、雑貨にも関心があるが、オーガニックを徹底したようなこだわりが強いマルシェだと気が引けてしまう。

4. 来住者が求めるつながり方—聞き取り調査の分析から

来住者それぞれに、程度は異なるが出会いやつながりを求めていることがわかる。

A～D さんは、夫は出身地真庭への U ターンであるが、妻としては、真庭市に関する知識がなく、つながりを持ちたい傾向にある。その中で、B さん、D さんは、体育施設内にあるジムに行くなどしたが、自分と世代が違い思うような成果がなかった。

このことから、ヨガなど体を動かすことに興味がある女性が多いが、体育施設内のジムやヨガ教室の存在を知られていないため、交流の場として活かしきれていない。今ある施設やイベントを活かすためにも、来住者へのアナウンスを充実させる必要がある。これまでの情報提供は、回覧板や人づて、告知放送などであったが、インスタグラム、フェイスブックなどの SNS やインターネットを活用して情報収集している人が多いことから、SNS やインターネットでの情報発信の充実と情報を受け取ってもらうきっかけづくりが必要だといえる。

近隣市出身の E さんや市内出身の F さんは、ネットワークや地域に関する知識が比較的あるが、地域との関わりが乏しいと感じている。ケーブルテレビや広報誌、告知端末を通じて地域の情報が来住者にも確実に伝わる仕組みを作ったり、行政窓口や公共施設窓口において職員が真心を持って対応することで、地域の一員として実感してもらえるのではないかと。

そして、子育てが新たなつながりを持つ機会になっている。子育てサロンや親子クラブは真庭市内の各地域で活動しており、同じ環境の女性が新たに出会い悩みを相談しあうコミュニティ形成の場として重要な役割を果たし、来住者にとって欠かせない存在になっている。例えば、真庭市久世地域にある「くせ活き生きサロン」では生後 3 か月から 1 歳未

満の子どもと母親を対象にした「よちよちひろば」、未就学の乳幼児と母親を対象にした「わいわいひろば」という行事を毎月 1 回行い、同じ悩みを持つ母親同士がつながりやすい場づくりに力を入れている。

また、食や雑貨、マルシェなどに関心が高く、C さん、D さん、E さんはイベントへの参加経験があり、今後も参加してみたいとのことだった。マルシェには地域のお店や地域住民が参加しており、地域との関わりを持つきっかけとして有効だと考えられる。マルシェへの参加を働きかけることで、より多くの人に地域に関わってもらえるだろう。

D さんは、夫が地元ということで夫の友人経由で知り合いができています。また C さんは、知り合うのであれば、同世代の子育て世帯と家族ぐるみで仲良くなりたいということだった。一方で D さんは、人間関係の面から夫とは別のつながりを望んでいる。子どもつながり以外に、自分の知らない世界で活躍している知り合いが欲しいと思っており、家庭や職場以外の趣味やそれ以外の出会いやつながりも求めている。

5. サードプレイス・居場所の事例分析—愛知県岡崎市「ここ de やる Zone」

ヒアリング分析から、D さんが求めているような家庭や職場以外の人が集い、つながる場づくりがどのような形で実践されているか、自分自身が活動を行うことを前提に、愛知県岡崎市で行われている「岡崎市空き店舗撲滅運動ここ de やる Zone」（以下、ここやる）の取り組みを事例分析し、真庭市でも出会いの場やつながりを作り出す方策を考える手立てとしたい。

「ここやる」は、平成 28 年 1 月に岡崎市役所の若手職員である晝田浩一郎（当時 28 歳）さん、はじめ 4 人が業務外で有志団体を立ち上げて進めている。長野県塩尻市の「nanoda」（代表山田崇氏）を参考に、市役所内外から賛同者を募り、お金を出し合って商店街の空き店舗を借り上げ、家賃については大家の協力もあって相場より安くしてもらい、約 40 m²の面積で当初半年の賃貸借契約から始めた。プライベートで活動をする意義として、自由度が高くやりたいことを早いスピードで実行できること、「ここやる」を市役所から独立させた「出島」と位置づけて自身が異動しても関わることができ、さらに異動先で得た知識によって活動の領域が広がることを挙げている。最初は 4 人で資金を出しはじめたが、現在では庁舎内にも資金援助してくれる人が 40 人程度おり、規模を拡大しつつ多くの方が参加している。

誰でも何かやりたい時に利用できるコミュニティスペースとして、「楽しい！」をみんなですべて共有できるよう活用したところ、20 代から 80 代まで延べ 4,000 人以上の参加者を得て、2 年間で約 400 回のイベントを実施し、そのうち半数程度はまちの人たちの主導によるものという。平成 30 年は、188 回のイベントが実施され、そのうち 118 回はまちの人が主催。延参加者数 1,469 人となっている。

参加は自由で、イベント企画も自由。「なにかやりたい」「こういうことやってみたい！」という人を募り、さまざまなイベントを企画。楽しみながらやってみるという姿勢で「やってみたいを实践できる場所」「出会う場」「集まれる場所」となっている。

イベントには毎月第 4 水曜日に晩御飯を持ち寄って語り合う「たべおか」やバトン方式

でまちの人の話を聴き、「想い」を伝承する企画、他地域団体との交流など、場を通じて普段知り合うことがない人と人、人と地域がつながることを実現している。

また、地域の人が「ここやる」をトライアルの場、失敗できる場として活用することで何か新しいことを始める際のハードルを下げるができているとのことだった。

6. 提案：真庭市における来住者の居場所づくりに向けて

ヒアリング調査の分析や事例分析をもとに、来住者の居場所づくりのために、自分自身が今後行えそうなこと、仲間とできそうなことなど、真庭市の中でできそうな取り組みについて考えていく。

(1) 自分の周りの来住者をまずつないでみる

まずは自分の手の届くところから始めるために、実際に市内出身の自分の妻を市内出身の私の友人と来住者である友人の奥さんに紹介してみた。

当日は、仕事終わりに友人宅へ妻と訪問し、鍋を一緒に食べる約束をしていた。妻は、友人と友人の奥さんとは一度あいさつ程度の話をしたことはあったが、しっかりと会話するのは初めてだった。訪問するとまず挨拶を簡単にすませて、自分を中心に妻と友人妻と会話をした。互いの仕事に関することや新婚生活について話をして、理解しにくいことは私が補足しながら和気あいあいと食事をし、2時間半ほど時間をすごすことができた。

後で妻に感想を聞くと、夫つながりで知り合いを見つけることについて抵抗はなかったという。「はじめは緊張したが、仕事や結婚生活など共通の話題があり、年齢も近く（妻が26歳、友人の妻が29歳）、友人の妻も人見知りしない性格だったため、すぐに打ち解けることができた。今回のつながる機会はとてもよかった。また会いたい。次回は自宅に招待したい。今回は料理を作ってもらったが一緒に作ればさらに距離が縮まるかもしれない。」と前向きな反面、適度に会う機会がないと疎遠になってしまいそうで、直接やりとりするまでにはまだ時間がかかりそうとのことだった。

私としても、引き合わせるまでは少し不安があったが、妻と友人の奥さんが仲良く話している姿を見てほっとした。最初は、自分自身が会話のきっかけを作るように意識したことと、私が友人の奥さんと以前から面識があったので、比較的早い段階から会話が弾み、すぐに打ち解けることができた。

やはり3人以上での会話だと会話が続きやすく、気持ちにも余裕ができて落ち着いて話ができ、共通の話題があれば話の中で次の話題が出てきてなんとかなりそうで、まずはきっかけが大切なのだと改めて感じた。

自分の知り合い同士がつながり、仲良くなることは単純にとてもうれしいと感じた。ただ、夫次第でつながりが持てるか、また、夫をきっかけとしたつながりはその後も夫経由でのやり取りになりそうで、その後の付き合いが夫次第になることが課題だろう。

今後も、知り合いで市外出身者の人がいたら積極的に関わり、人と人をつなげていくことを行っていきたい。

(2) 新たな出会いの場を市内に生み出す実践へ

D さんの言葉にあったように、自分の知らない分野の人や地域で関わりのなかった人と新たに出会える場を、「ここやる」の取り組みを参考にして増やしたいと考える。数人の同僚にこの活動の趣旨や内容を話してみると、一緒にやろうと賛同してくれる人や、すでに「ここやる」の取り組みを知っていて、興味を持っている人もいた。

また、別の同僚は DIY で改装した自宅の倉庫を利用し、地域の人や職場の同僚を集めて食品廃棄に関するドキュメンタリー映画「もったいない！」を上映しながら鍋を食べる会を企画するなど、すでに自ら活動している。私と妻も参加したが新たな出会いと学びの機会を得ることができとても楽しい会だった。その同僚に話をした際も一緒に何かやろうと話をしてくれた。

「ここやる」の場合には、第 4 水曜日に晩御飯を持ち寄って語り合う企画や、地域の飲食店、自営業者などさまざまなひとの話を聞く、「ここ de 『まちの人の話を聴く』』という企画がある。

そこで、真庭市でも気軽に参加したくなり、普段知り合わない人と知り合うことができるイベントを開催し、参加者同士の関わりが深くなる企画を考えていきたい。

場所についても、「ここやる」のように、商店街の空き家スペースもしくは店舗を一時的に借りるという方法も検討できるが、先の話に出た同僚から、「企画があれば自宅の倉庫スペースを利用してみては」との提案をもらった。

開催時間帯についても、同僚に相談してみた。候補としては、B さん、F さんなどフルタイムで勤務している方については、平日 6 時から 1 時間程度、また土曜午前中 10 時 30 分～12 時までの 1 時間 30 分とすることで参加しやすくなる。あるいは、A さん、C さん、D さん、E さんなど小さな子どものお母さんについては、家事がひと段落して比較的時間を作りやすい平日午後 1 時 30 分～15 時の 1 時間 30 分とすることで参加しやすくなる。ただ、平日の日中は同僚も仕事があるため、活動できる時間は基本的には平日の始業前か夕方以降、土日に限られ、継続できる仕組みを考えていきたい。

また、企画については、将来的に「ここやる」のように参加者が主体となりイベントを企画し、やりたいことを実現できるようにしていきたい。A さんから話があったように、特技やパワーがあるのにそれを発揮できていない人がやりたいことを実現し、人と人がつながるきっかけを作る人が増えれば、今の時代にあった新しいコミュニティが生まれるのではないだろうか。



写真 1 映画上映会の様子

(3) 真庭市で展開している資源の積極的な活用

今回聞き取りをされていて、真庭市にも実は人と人がつながる場はあるということを実感した。Bさん、Dさんが通っていた体育施設は真庭市勝山地域にある真庭市健康増進施設で平日は10時～21時、日曜、祝日は10時～20時まで利用でき、設備やプログラムも充実している。また、真庭市落合地域の体育施設内にもジムが併設されており平日、土曜、祝日は9時～22時、日曜は9時～17時まで利用可能で休日や仕事終わりに利用できる。



図2 きたまちマルシェフェイスブックページより

しかし、施設利用者も50～60代のリピーターが多く、地域のことを知らない来住者にとっては情報が入りにくく、利用しにくい状態である。

また、真庭市内でもマルシェの開催が増えている。例えば、有志の実行委員ほか真庭市交流定住センター、地域おこし協力隊などの地域に積極的に関わりを持つ人たちが地域で活動している取り組みや商品を広く知ってもらうために企画した「やまびこマーケット」や真庭市久世北町公園で地元の住民団体が企画し開催されたコミュニティマーケット「きたまちマルシェ」など来住者にとって楽しみながら地域に関わる機会が増えている。

このような施設や企画を単なるイベントとしてとらえるのではなく、来住者が地域と関わりを持つきっかけの場として位置づけ、情報発信に力を入れていくべきである。市役所でもまず転入手続き時に、このようなつながる場について、お知らせすることができないか、その後も定期的に伝える手段を考えていきたい。



写真2 カフェスペース (旧上田小学校職員室)

そして、真庭市は面積も広く移動に必ず車が必要であることから、気軽に足を運ぶことができる場がそれぞれの地域にあることが望ましい。真庭市内でも小学校の統廃合が進み、廃校の活用が課題となっている。そのような中、真庭市にある旧上田小学校ではカフェ、美容室、ゲストハウス、コミュニティスペースとしての活用が始まろうとしている。

このような人と人、地域と人がつながる場を作る取り組みを支援するとともに、廃校の一室を活用して定期的なバーや料理教室の開催、出張カフェ、出張サロンのスペースとして活用するなど、スペースや時間を区切った利活用の方法を模索し、ネットワークの拠点

や交流の場としての利用も検討していく必要がある。

おわりに

今回のレポート作成の過程で、課題意識を持ち地域づくりに取り組んでいる職員に会い、また、相談をする中で一緒に何か取り組みをしようと声をかけてくれる職員もいた。一人ではないと心強く感じ、これからの取り組みへの励みになった。

聞き取りをする中で改めて考えさせられたことは不安や悩み、暮らしに対する考え方は一人一人異なり、画一的な取り組みで解決することは難しい。それでも、できることをまず一歩ずつやってみる、失敗しても挑戦し続けることが大切になる。こうして、いろんな人がいろんな形で地域に関わっていくことで変化が起き、新たな関係性が生まれるのだと感じた。市職員として住民としてできることから行動していこうと思う。

【参考・引用文献】

- ・真庭市ホームページ <http://www.city.maniwa.lg.jp/>
- ・総務省統計局 平成 17 年国勢調査、平成 27 年国勢調査 <https://www.e-stat.go.jp/>
- ・岡崎市空き店舗撲滅運動ここ de やる Zone ホームページ <https://okazaki-coco-yaru.jimdo.com/>